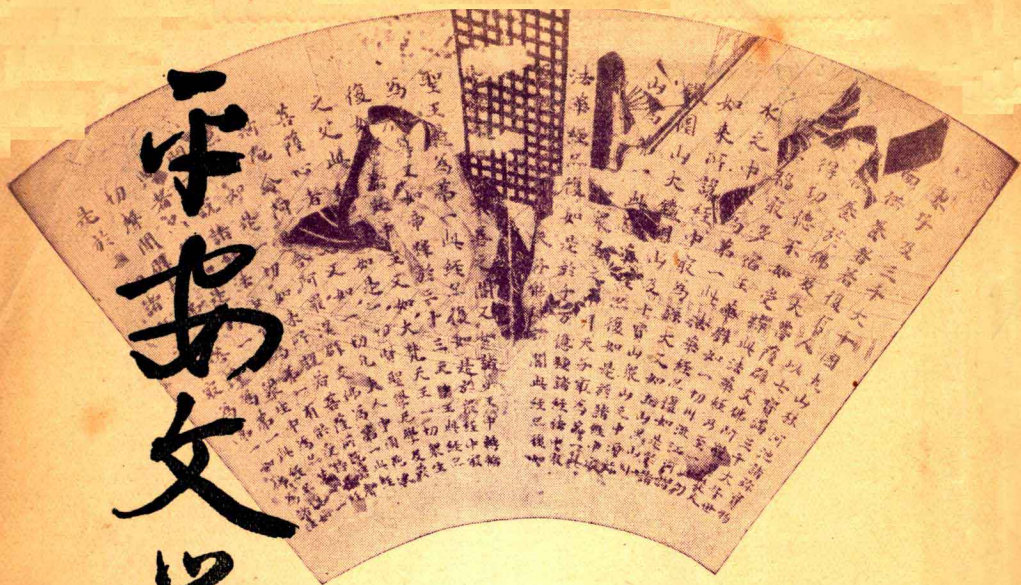


平安文学研究

第十輯



京都語譯源氏物語を……
新撰和歌集成立論……
對話消息文・動詞「まかつ」……
榮花物語と往生要集(中)……
榮花物語雜記四——

松尾 中春 野田 春水 宮田 一郎 松村 博司

「發見と報告」

雪月抄について……山脇 毅
有賀長伯の伊勢物語秘々注……谷山 旦茂
源氏物語「うつくし」について……大塚 正一郎
源氏語法研究ノート……寺田 元亮
「たごし」(手興)「たちたる」……田中 重太郎
たてたる・たてる「きほひか」考……田中 重太郎
ゝる・きほひかへる」考……田中 重太郎

枕冊子語彙考證——

〔研究發表要旨〕

濱松中納言物語に描かれた「唐の后の昇天」について……鈴木 道雄
御裳濯河歌合に於ける「鳴立つ澤」の判詞(俊成)について……宮田 元亮
枕草子に於ける形容詞「めでたし」について……福久 昭子
枕草子に於ける修飾語について……知久 房子
自己紹介のページ……柿谷 雄三
をば君か兼家か……

新撰和歌集成立論

野 中 春 水

紀貫之を論じ、古今集時代を説くときに、新撰和歌集がその有力な資料となつてくる。本朝文粹にその序文がのり、玄々集、袋草子、或は十訓抄以下に、その貫之撰な和歌集がそのなく取扱はれてゐる。ところが、かつて武田祐和歌集がその貫之撰であるかは疑はしいとして「紀氏と新和歌集がその題する論文（國文學研究、歌道篇所收）を發表され、和歌集がそのほかつ爾後の諸研究において、この新撰和歌集の御説など。合は依然として貫之撰を肯定してその上に論が進の上に論る——例へば、近く、久曾神昇氏の「新撰和歌の御説など。（日本文學研究、昭和二十六年一月號）の御説など。しか

武田博士の御説は如何に考へるべきものであらうか、こつてあまり深い論評をきかないまゝに、この小稿においては、この御説を検討し、その成立事情をたどつてみたい。としてはやはり、貫之撰を肯定しようとするのである。

田博士の御説の中心は新撰和歌集の序に云ふところと、内容の矛盾するかに見える點にある。即ち、序文に

新撰和歌集序

玄蕃頭從五位上紀朝臣貫之

昔延喜之御宇屬世之無爲因人之有慶令撰集萬葉集外古今和歌一千篇更降勅命抽其勝矣傳勅者執金吾藤納言奉勅（類從本詔）者草莽臣紀貫之云々（類從本貫之）未及拙撰分憂赴任歌一之餘景漸以撰定抑夫上代之篇義漸（類從本尤）幽而文猶歌一流之作文偏巧而義漸疎故抽始自弘仁至于延長詞人之作歌一相兼而已今之所撰玄之又玄也……（元祿板本による）

歌一てゐるのに對して

古今集の歌の入つてゐること

二、萬葉集の歌の入つてゐること

三、延長の次の承平から本書の成つたといふ天慶六、八年

の頃まで十三、五年を下流之作といふのは短かすぎる

四、延長に至る詞人之作とは延長まで生存した人なのか

かうすれば貫之や兼輔たちと矛盾する

といつた點をまづ指摘されてゐる。

さて、このうち特に問題になるのは上代といひ、下流と云ふことと、弘仁より延長に至ると云ふこととの關係である。

この點については彌富破摩雄氏も疑をもたれ、國學院雜誌の

昭和九年二、二月號の「新撰和歌集と貫之の和歌意識」と題する論文において一つの解釋を試みられてゐる。即ち、この序文の箇所を

昔延喜の御宇に萬葉集外の古今の和歌一千篇を撰集したが、その後更にその中から最も優秀な歌を抽んでよとの勅命があつた末だこれを抽撰するに及ばずして土佐に赴き政務の餘暇に漸く撰定した熟ら考へるに上代の歌は義が幽かで表現が素朴であるがさる方にもまた捨てがたいものがある。これに反して後世の歌は表現は巧妙であるが義漸く疎漏である。故に後世のものは弘仁から延長に及ぶまでの歌で花實相兼ねたものを抽撰した。かくして選んだ所のものは玄之又玄なるものである。

とされてゐる。即ち下流之作とは弘仁より延長までをさすものであり、花實相兼ねたるものを後世の歌のみに限定されたのである。従つて弘仁までのものを上代之篇と考へられたのである。この御説は萬葉集の歌の入つてゐることの矛盾性を除かむとするための一解釋であるが、この序文の箇所を素直に讀むならば、果してこの解釋は自然であらうか。この

上代之篇義漸幽而文猶質

下流之作文偏巧而義漸疎

の文は對照的に書かれてあつて、然もこれらは次の「花實」とひびき合つてゐるのである。即ち一方は實を主とし、一方は花を主としてをり、それぞれ、その偏頗を難じてゐるのである。従つて、貫之が庶幾してゐるものは、あくまでも花實

相兼ねたものなのである。故に抽くといふのは花實相兼ねたものを抽くのが目的である。この上代下流の二つの句は次の文に平等の重さをもつてかゝつてゐるのである。弘仁より延長までが下流の作であることを示してゐる根據はこの序文からは感じられない。彌富氏は萬葉の歌の入つてゐることに強く意を注がれて、こゝに「さる方にもまた捨てがたいものがある」といつた言葉を補はれたのであるが、この序文においてはこの補ひの言葉を用ふる必然性は見られない。このところ、類従本、元祿板本の返點のつけ方に

類従本 故抽_下始_上自_上弘仁_上至_上于延長_上詞人之作_上花實相兼_上

而已

元祿本_上故抽_下始_上自_上弘仁_上至_上于延長_上詞人之作_上花實相兼_上

而已

の相違があるが、元祿板本の方がこの意を徹底してくれると思ふ。萩谷朴氏も、朝日古典全書「土佐日記」附載、新撰和歌序の「花實相兼」の頭註において

上代の歌の表現が素朴で感情の豊かなのと、近代の歌の精神が空虚で修辭に巧みなのと、花と實と双方のよいところをぬき集めたと、花實相兼ねたるものを上代、下流のいづれにも限らない説明をされてゐる。問題の萬葉集の歌については後述――。

さて、この點についての武田博士の御説は、上代のものにも、下流のものにも、これこれの難點があるから上代と下流

の時を排除した弘仁、延長間のものを選んだとの御考へが基礎になつてゐる。ところで新撰和歌の歌を見てゆくと、作歌年月の判明する最も新しい歌に次の二首がある。

櫻色にまさる色なき花（類従本春）なればあたら草木もものならなくに

とこ夏の花をしみればうちはへて過す月日の時も知られず即ち、この二首は、作者は共に貫之であり、延長七年十月十四日に行はれた陽成院一のみこ、元良親王の四十賀屏風歌である。正保版歌仙歌集によれば延喜十年となつてゐるがこれは誤であり、親王の薨去は天慶六年（九三三）五十四歳であつて延長七年（九三六）に四十賀が行はれたと見るべきである。

なほ「とこ夏の」の歌は拾遺集卷十六にも選入されてゐるが、この詞書も同じく延長七年である。このやうに最も新しいものとして延長七年十月の歌を見るのであるが、翌八年正月には貫之は土佐守を拜命してゐるのである。十訓抄には正月にすぐ赴任したと云ふやうに書いてゐるが直ちにこのやうには斷ぜられないのであり、しばらく間をおいてからであらうが、延長八年に赴任したことは確實であり、貫之集卷六「百草の花の影まで……」の歌の詞書に「延長八年土佐の國に下りて……」と見られるところである。ともかく延長末年において貫之は中央歌壇から離れるのである。然もなほ、注目しなければならぬのは延長八年の九月には命を下された醍醐

天皇は崩御され、翌承平元年には宇多院もついで崩御されたのである。いはば、貫之の取材活動は延長末年でもつて終止符をうたねばならぬ状況である。このことは延長以後の歌が「文偏巧而義漸疎」であつてもなくとも、そんな事とは無關係に當然、これらは除外さるべきものである。事務的な面において、撰歌の對象となるべきものは延長末年までである。即ち花實相兼ぬるといふのは延長までといふことになるのである。

この終りの延長に對して始めを何故、弘仁としたのであるか。即ち延暦大同或は天長承和その他であつてはいけないのか、この弘仁の意義を考へたい。一體に、古今集撰集の業が萬葉集を意識して行はれたことは衆知のごとくである。始めの名が「續萬葉集」であつたことや、それはまた「萬葉集に入らぬ歌」と具象化された。ところで貫之當時萬葉撰定の時代を如何に考へてゐたかについては、古今集序文の

いにしへよりかくつたはるうちにもならのおぼんときよりひろまりにける……

以下をめぐつて種々論議されてきたところであるが、要するに例の

かの御時よりこのかた年は百とせあまり世は十つぎになむなりにける

を素直にうべなふ時は「ならのみかど」は平城天皇に考へる

のが自然である。貫之の眼からみれば萬葉時代の終止を平城天皇の大同年間としてゐたと考へてよいと思ふ。さうするとこの次に來るべきものは、まさに嵯峨天皇の弘仁の世である。いはば貫之にとつては弘仁以降が自分達の和歌の世界、即ち古今集の世界なのである。古今集の中から秀逸なるものを抽けとの勅命である。貫之はこれを單に既成の古今集中から選拔せずに、古今集を母胎とした和歌年代の歌、換言するならば廣義の古今集時代の歌から選んだと考へたいのである。時代においても古き世新しき世各々花實の特色はある。こゝに花實相兼ねたる玄之又玄を選んだと考へるのである。勿論古今集に入つてゐるものは、それが弘仁以前の歌であつても撰歌の對象となり、安倍仲麿の「天の原」の歌も入つてゐるのも妥當なわけである。一方、古來古今集に撰入なき故不審視された（袋草子）亭子院歌合の名歌「櫻散る木の下風も」もこれには選入されてゐるのである。三百六十首中、二百八十一首の古今集自體の歌を撰んでゐるのである。

次に、問題とすべきは萬葉集の歌の入つてゐることである。萬葉集の歌については前記久曾神氏の論文があるが、萬葉集そのものに入つてゐるものとしては十一首（國歌大觀番號にて示すと（二六、五九、六四、一三四、一四五、一五七、一五八、一五九、一六〇）がある。古今集自體において萬葉集の歌は入れぬと宣言しておきながら、事實入集してゐることについ

てはこれ又種々論ぜられてきた。（例へば、この場合の萬葉集とはその卷一、二をさすのである等）。然しながら大體の有力な論としては

萬葉集以外の資料より入れられたものが萬葉集にもあつて恰も萬葉集より採つたかのごとく見える——たとへば平安時代にまだ滅んでゐなかつた憶良の類聚歌林や琴歌譜に引かれた古歌抄などの歌集から抜いたのではあるまいか（安田喜代門氏「古今集時代の研究」）

との説である。ところでこの新撰和歌集の場合も亦古今集の際と同じく萬葉集以外の古歌集や或は口誦より抜いたのではあるまいかと考へたいのである。（彌富氏もこの點について觸れてゐられる）。即ち萬葉集に對しては古今集と同一の條件をもつて新撰和歌集も選ばれた。換言するならば結果的に、古今集に萬葉歌が入つてゐることと新撰和歌集にも萬葉の歌が入つてゐるのである。元祿板本には作者名が記入されてゐるが、この作者名は信をおくに足りないものであつて、これは後人の所作と考へるべきである。久曾神昇氏は前述論文のなかで最初は新撰萬葉集などの如く、作者名が無かつたかと思ふと述べられてゐるが、まことに同感である。萬葉集における高市黒人の、三國人足の、或は人麿歌集の歌などが古今集においては「讀人しらす」の歌と取扱はれてゐるのと同様に、新撰和歌集の萬葉歌も亦「讀人しらす」のものとし、然も弘

仁以後の歌と見做したのであらうと考へるのである。當時既に萬葉の歌が訓めなかつた點に起因もあらうけれど、萬葉集と語句の随分違つたものゝあること、或は二八六一の歌

磯上 生小松 名惜 人不知 戀渡鴨

の場合などは、この歌でなくして「或本歌曰」と附記してある。

岩上爾 立小松 名惜 人爾者不云 戀渡鴨 (新撰和歌四句、ことには云はず)

の方を基礎にしてゐることなどは、萬葉集以外の資料によつたと見られるその片鱗を示すものと思はれる。

以上の記述において武田博士の御説の前記四つの點に觸れたのであるが、次に武田博士は、御説の五として、和泉式部の歌と類似の歌のあることを指摘された。即ち

みな人は心ごころにあるものをおしひたすらにぬるゝ袖かな

といふのがあるが、これは後拾遺集卷四 (八七) に、和泉式部の歌として

さまざまに思ふ心はあるものをおしひたすらにぬるゝ袖かな

とあるに類似することである。もつとも武田博士も、或は作者撰者のうちにて思ひ誤つたか、或は誤記したかとも云はれてゐるが、このことについては二つのことが考へられる。一

つは果してこれは眞實、和泉式部の歌であるかどうか、即ち後拾遺集の記載が正しいかどうかのことである。この歌は和泉式部家集及びその續集にも見あたらず、所謂宸翰本系統のもの、たとへば傳後土御門院宸翰本や日本古典全集の和泉式部集に正集、續集について和泉式部歌集補遺が編纂されてゐるが、その基礎となつた後醍醐天皇宸翰本などに見えてゐるのである。この系統のものは大部分の歌が勅撰集にあるものであり、或は逆に勅撰集によつて補足されたのではないかと想像されたりする。然し、ともかくこの後拾遺集の歌は和泉式部の歌となつてゐるので、これを一應彼女の歌と認めても、更に次のことが考へられる。即ち、和泉式部がこの新撰和歌の歌を知つてゐて、これを土臺にして詠んだといふことも亦可能ではなからうか。たとへば宸翰本系統の歌集に、この歌の次に

忘れなむものぞとおもひしそのかみの心の占ぞ正しかりける

といふのがあるが、これはまさに古今集戀四の (七〇) と類似してゐる。前の歌ほどの緊密性はないにしても、少くともこの古今集の歌の影響下にあることは當然云へるであらう。これと同じく前の式部の歌も新撰和歌の歌の影響下に生まれたと見るのも無理ではあるまい。即ち、この一首が直ち

に新撰和歌集の成立を和泉式部の時代或はそれ以後にひき下ける根據とはなり得ないと考へる。

次に、御説の六として、古今集の序文が

臣等詞少春花之艷名竊秋夜之長況哉進恐時俗之嘲退慙才藝之拙（眞字序）

それまゝくと言葉春の花のにはひ少なくしてむなしき名のみ秋の夜の長きをかこてればかつは人のみみにおそりかつは歌の心にはちおもへど……（假名序）

のやうに極めて謙讓な態度で書かれてゐるのに對して、新撰和歌集の序文においては

今之所撰玄之又玄也非唯春霞秋月漸艷流於言泉花色鳥聲鮮浮藻於詞露皆是以動天地……

とか

若貫之逝去歌亦散逸悵使絶艷之草復混鄙野篇故聊記本源以傳末代云爾

といったやうに、辭をつくして自分の選んだ歌を稱譽してゐるが、これは貫へらしからぬ點を指摘された。又貫之自身の歌數が多いことも指摘されてゐる。然しながら、この撰歌の目的が専ら秀歌を抽く點にあり、それも單に既成の古今集ばかりでなく、それを背景とした廣い古今集時代の多くの歌群の中から苦心の末抽出したのである。貫之自身への自畫自讃ではなく抽出された秀歌の榮譽をたゞへたのである。古今勅

撰の業に比べると多分に私的な性格が含まれてゐることは否めない。自分が自信をもつて抽出した珠玉を誰はばかることなく讚美したのである。又「讀人しらず」の歌を除けば彼の歌が最も多い。即ち

貫之四五首、素性二〇首、友則一三首、躬恒一〇首……

であり、彼の歌は全體の一割二分である。然しながら古今集そのものにおいても彼の歌が最も多く流布本によれば一〇三首で全體の一割であつて、彼一人の意志のまゝに撰歌された新撰和歌集だけが特に多いと云ふのではない。もしも、古今集が一割である故に、新撰和歌集もそれに比例させて、後人が作つたといふならば、同様のことを他の歌人にも及ぼさなければならぬ。即ち古今集の歌數の順について云へば、貫之についで

躬恒六〇首、友則四六首、素性三八首、忠峯三六首

であるから、新撰和歌集の順はこれに比例はしてゐない。むしろこの様に、彼の歌數が最も多くかつ一割平均といふのは自然な狀況であり、この點、彌富氏も前述の論文の中において

その自信抱負信念の鞏固なことは古今集撰定の時と同じく彼にと

つてはこれは當然の事である

と述べられてゐるがその通りであると思ふ。

更に又、これに附隨して、武田博士の述べられてゐること

は、古今序の

動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜和歌

は和歌に對する一般論であるが、新撰和歌序の

皆是以動天地感神祇厚人倫成孝敬……

は直ちに書中の歌を推してゐる。古今序は歌の理想を述べ、新撰和歌はこれが實現を證す、即ち貫之の論でなくして崇拜者の所爲となすべき所以であるとの論である。ところで、これは古今序が一般論であるから新撰和歌序も同様でなければならぬといふ必要はない。むしろ、一般論、理想論を述べたのに對して、それを具象化し實證化することが自然ではなからうか。玄之又玄の秀歌を集めて、これこそその實證であると述べる方が當然の成り行きと考へる。この事をもつて同一人でないといふことはどのやうなものであらうか。

最後に、新撰和歌集が、春に對して秋、夏に對して秋、以下戀に對して雜の歌と對偶式の配列が行はれてゐることであるが、これは天慶としてはやゝ早きに過ぎる、更に下して歌合の盛に行はれるに至つた時代の作とすべきであるとの御説である。

この對偶の配列形式が歌合などの影響をうけたであらうことは、久松潜一博士も「和歌史、總論古代篇」において

かういふ分類配列は新撰萬葉の和歌と漢詩とをならべて配列してゐる如き點から影響をうけ、進んでは歌合の發生の意識から導か

れたものと思はれる。

と述べられてゐる。いかにもかういつた點の影響下にあつたとは云へるが、一體に當時の文藝の世界においては修辭上の對偶形式は好んで用ゐられたところであり、和歌の對句、漢詩文においても隨所に見られるところである。かういつた對偶形式を愛する感覚が自ら和歌配列の新様式を生み出したと考へたいのである。又歌合から來たにせよ必ずしも歌合の盛になつた後代をまつ必要はなく、當時においても歌合は盛であり、新撰萬葉の序文の

當今寛平聖主萬機餘暇舉宮而方有事合歌

といつた狀況であり、山岸徳平氏は「歌合の起源と古今集以前の歌合」(東京文理大「國語」創刊號、昭和十一年七月)において古今集以前のものとして一三七回の歌合を現存の諸資料から數へてゐられる。特にその中において宇多醍醐の御代においては一一〇回が數へられてゐる。かういつた狀況において貫之がこの新様式を編み出したとしても不自然ではないと考へる。

以上武田博士の提示された貫之擬撰説に對して、必ずしも貫之撰を否定する根據は強力ではないと一應の解答を試みたのである。そこで私論を要約すると

古今集から秀歌を抽出せよとの勅命を兼輔を通じてうけた貫之は完成をまたずして、延長八年土佐赴任のこととなり、

彼の地において政務の餘暇に撰定した。貫之はその精粹を選ばんがために、單に既成の古今集のみに拘泥せず、古今集を背景とする和歌年代、彼の眼による廣義の古今集時代、即ち弘仁より延長に至る時代の歌群から選んだのである。然もその間、古き世新しき世の歌に、花實それぞれ偏するところがある。その花實相兼ねた玄之又玄の歌を抽出したのであ

中古語法覺書（九）

對話消息文・動詞「まかつ」

る。承平五年二月歸京の後、奉らんとしたが天皇既に在さず、天慶六、八年の候（序文の署名の玄蕃頭從五位上であつた時）にその散逸埋失を恐れて、序を附して世に現した。といふことになる。即ち、新撰和歌集は、通説のごとく貫之撰として、貫之及び古今集時代を研究する重要な資料と考へたいのである。（昭和二七・一一、二）

宮田和一郎

一
對話の場合や消息文において、著しい特色としては、口語を用ひるといふことである。口語は、口頭の對話や消息文のみ（稀に和歌に）あらはれる用語であることはいふまでもないのであるが、平安時代にあつては、現代と趣を異にし、對話や消息文に必ず口語を使用しなければならないといふわけのものではなかつた。すなはち、地の文に用ひる用語を以てしても、自由にかつ十分に用は足りたのである。であるか

ら、口語を全然使用しなくても對話が出来、また消息文は書かれた。従つて、口語を用ひてない對話文消息文を見ると、平安時代は言文一致であつたやうにみえるのであるが、すこし注意してみれば、いくら口語が使用してなくても、對話文消息文の部分と地の文との間には、語法的に大きな隔たりの存在することに氣づくのである。その顯著な相違點の中で、次の如きはその一つである。

蓬生の露わけ入り給ふにつけても、恥かしうなむ。

（桐壺）

かくかしこき仰言を光にてなむ。

いと忍びがたきは、わりなきわざになむ。

百數にゆきかひ侍らむ事はましていと憚り多くなむ。

かくておはしますも、いまいましう忝くなむ。

これもわりなき心の闇になむ。

うへもしかなむ。

今はつらかりける人の契りになむ。

かたくなになりはつるも、さきの世ゆかしうなむ。

かごと聞えつべくなむ。

かかる仰言につけても、かきくらす亂り心地になむ。

ありがたき御かたち人になむ。

通ひて見え給ふも、似げなからずなむ。

みづからも怪しきまでなむ。

よべまうのほりしかど、なほえ堪ふまじくなむ。

とかく見給へあつかひてなむ。

尋ね知らではさうさうしかりなむ。

いと嬉しかるべくなむ。

かしこになむ。

いとしも人にと、くやしうなむ。

以上は、夕顔の巻までにおける對話文（一つだけ消息文）の中からあけた例であるが、共通的に、文末が「なむ」で終つてゐるのである。對話や消息文にあつては、直接相手の顔を見ながらか、相手を頭の中においてなのであるから、意味が先方に通ずればそれで十分であるといふことから、必ずしも

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

(帶木)

(空蟬)

(夕顔)

(同)

(同)

(同)

文の完結を必要としないのである。その點は昔も今も同様である。すなはち、一般的にいって、地の文にあつては、個個

の文はそれぞれ首尾完結されるのが常であるが、對話消息文

にあつては、文法的ないひ方をすれば、成分の省略といふこ

と、それが本則といった語法を取るのである。その中で文末

をいひ放しにする場合には、助詞「なむ」を以て結ぶのが最

も普通であつたやうである。夕顔の巻までの間に、

さりぬべきすこしは見せむ。かたはなるべきもこそ。

と「こそ」で結んだ例があつたが、「こそ」で結ぶのは異例の

やうである。また、

いと無禮にて聞ゆること。

人にいひさわがれ侍らむがいみじきこと。

頼もしき人にて年頃ならひ侍りけること。

と、「こと」で結んだ例も若干見られる。要するに對話消息文

にあつては、文法的成分の省略が一般的の慣例であるが、

文末をいひ放しにして、意中を言外にいひつくさうとする場

合には「なむ」を以て結ぶのが普通であつたやうである。も

つとも、これは源氏物語の語法を中心としたものであるか

ら、その點を附記しておきたいと思ふ。

二

前號において、口語動詞「まかる」について卑見をのべ、
ついでに「まかる」には反對語はなく、「參る」が「まかる」

の反對語の如くに考へられてゐるけれども、「參る」の反對語は「まかづ」であることを附記しておいたのであるが、今回はその「まかづ」と「まかる」とを比較して、その相違點をあきらかにしておきたいと思ふ。

語の種類からいへば、「まかる」は口語であるし、「まかづ」は、語源について、「まかる」との關係がどうであらうとも、語法的には文語であり、かつ共通語である。従つて、「まかづ」は、地の文には勿論、對話にも消息文にも和歌にも用ひられるのであるが、「まかる」は對話消息文の專用語である。この點において、兩者は根本的に相違してゐるのである。次に活用形及び承接の上から兩者を比較してみることにする。

「まかる」の未然形には「む」「ず」「ざり」「むず」が接續したのであるが、「まかづ」の未然形「まかで」には、「むず」は接續するけれども、「ざり」及び「むず」の接續例は見ない。そのかはりに使役助動詞「さす」が接續する。

藤壺のあすまかでさせむとあめれば

暇許されざるを、参りてまかでさせむ。

何せむにまかでさせて、ねたうこそ。

など、宇津保にも若干の用例があるが、源氏には、

母君泣く泣く奏して、まかでさせ奉り給ふ。

わりなく思ほしながら、まかでさせ給ひつ。

(藏開下)

(同)

(國讓上)

(桐壺)

(同)

その夜大臣の御里に源氏の君まかでさせ給ふ。
つとめてこの箱をまかでさせ給へるにぞ
俄かにまかでさせ奉り給ふ。

(同)
(葵)
(少女)

などのほかに、多くの用例が見られる。

次に、「まかる」の連用形には、助詞「て」、助動詞「ぬ」「たり」「けり」が接續したのであるが、「まかづ」の連用形「まかで」には、助詞「て」、助動詞「ぬ」「たり」の接續することとは同様であるが、「たり」の例は、

急なることにてまかでたれば。

(手習)

のほかに用例を知らない。そして助動詞「つ」「き」は「まかる」には接續例を見なかつたのであるが、「まかで」には、

只今なむまかでつるといへ。

(夕霧)

梨壺もその程すぐしてこそまかでつれ。

(國讓上)

今までお前にさぶらひていと苦しうてなむまかでしか。

(同)

などの例が見られる。このうち最後の例は、文法的に誤つてゐるのであるから、例證としては、信をおきたい。

以上はさう大きな相違點ではないが、「まかで」には、口語助動詞「侍り」と敬語助動詞「給ふ」とが接續する。これは「まかる」の場合には絶對にない語法であつて、兩語間の根本的の相違ともいふべきであらう。これも結局は、一が口語であり他が文語であることからの當然の結果といはなければならぬ。

まづ「侍り」の例からみると、

承りも果てぬやうにてなむまかで侍りぬる。

(桐壺)
(帶木)

月面白かりし夜、うちよりまかで侍るに

曉に御迎へに參るべきよし申してなむまかで侍りぬる。

(夕顔)
(末摘花)

しか、まかで侍るままなり。

大臣に傳へ申さむとてなむまかで侍る。

(同)
(須磨)

心強く思ふ給へなして急ぎまかで侍り。

(野分)
(紅梅)

心苦しきに、まかで侍りなむ。

疾くまかで侍りにしくやしさに

(浮舟)
(手習)

まかで侍りぬべし。

かたがた心亂れ侍りしかば、急ぎまかで侍りし。

(國讓上)
(忠乞)

さらばまかで侍りなむ。

などが擧げられる。これは比較的少數であるのに對して、「給

ふ」の例は非常に多い。

かかる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば、まかで給ひなむとす。

(桐壺)
(同)

わたくしにも心のどかにまかで給へ。

(帶木)
(藏開下)

俄かにまかで給ふまねして

暫しまかで給ひて、人の目ども休め奉り

(國讓上)
(同)

藤壺まかで給ふべかなり。

夜中すぎて曉までまかで給はねば

以下用例は省略するのであるが、この「侍り」と「給ふ」

とが接續するか否かといふことは、この兩語の相違を考へる

上において、極めて重要視しなければならない。このほか、
宇津保には、

曉になむまかでさぶらひつる。

(藏開下)

といふ例があるが、これには大きな疑問がある。この「さぶらふ」は助動詞としての用法で「侍り」と同じ意味に用ひてゐるのであるが、かかる用法がこの時代にすでに行はれて居つたか否かについては、更に詳細に検討を加へて見たいと思つて居る。

終止形の「まかつ」は、「まかる」の場合と同様に、用例は極めてすくない。いつもいふやうに、用言助動詞の終止形は、あまり多く用ひられないのが通例である。

(忠乞)

許させ給ひて、ゐてまかつ。

などは希例といふべきであらう。これも宇津保の中の例であるから、そのつもりで見なければならぬ。

連體形「まかつる」は、用例がやや多く見られるが、これとてもさう多くはない。

(薄雲)

やをらかしこまりてまかつるを

(少女)

歸りまかつる大學の衆ども

(同)

事果ててまかつる博士才人ども

(梅枝)

見參ばかりにてまかつるを

(幻)

導師のまかつるをお前に召して

(紅梅)

つとめてこの君のまかつるに

今日まかつる僧のなかに

(蜻蛉)

うちにも昔は、のちのちにこそ、まかつるを喜びにも。(國讓上)

已然形「まかつれ」は、次の一例より他に知らない。

(夕顔)

参る人人も皆立ちながらまかつれば
用例のすくない點は彼此同様であるが、彼には助動詞「り」が接續したのに對して、これには助詞「ば」が接續して、助動詞は接續しない。

命令形「まかでよ」は、

(末摘花)

この頃の臘月夜に忍びて物せむ。まかでよ。

「まかる」は平板式(前號に傾斜式といつたのは誤り)用語であるが、「まかつ」は傾斜式の下向語である。「まかる」には反對語はないが、「まかつ」の反對語は「まゐる」である。「まゐる」は傾斜式の上向語である。それが反對語であることは、「まゐりまかつ」「まかでまゐる」と用ひられ、また連續しなくとも、相關的に用ひられてゐる點から、さう斷定してよいと思ふ。

思すさまにて参りまかで給ふも

(潯標)

まかで参る車多くまよふ。

(玉羹)

牛車ゆるされて参りまかでし給ふを

(薄雲)

弓とては持たせて参りまかですれば

(藤原の君)

参りまかでするもわづらはし。

(田鶴の村鳥)

以上は連續の例であるが、以下は相關的の使用例である。

曉に御迎へに参るべきよし申してなむまかで侍りぬる。(夕顔)

まかで給ふべき日参り給へり。

(賢木)

あからさまにまかでて参らむ。

(葵)

例のまかで給ひてば、とみにも参られで

(國讓上)

せめて申してまかで給ひにし後は更に参り給はず。

(忠乞)

暇許されざるを、参りてまかでさせむ。

(藏開下)

参りもまかもせられぬ。

(同)

強ひてまかでてやがて参らず侍りしかば

(梅の花笠)

最後に、「まかる」は、若紫の巻に、雀が逃げ去つた時に、少納言の乳母が、

いづ方へかまかりぬる。

といつてゐる。すなはち「まかる」は人間以外の動物にも用ひたのである。ところが「まかつ」は、

(葵)

つとめてこの箱をまかでさせ給へるにぞと、無生物にも用ひた例がある。

なほ「まかる」は接頭語的に他の動詞と複合して一語を作り、しかもその數は多いのであるが、「まかつ」は「まかでありく」「まかで散る」「まかでつく」「まかでとぶらふ」など、わづかばかりの複合語を作つてゐる。その他「歸りまかつ」「すべりまかつ」などは複合語として取扱ふべきであらうが、「まゐりまかつ」「まかでまゐる」などは連續であつて複合語ではない。源氏の御法の巻に「まかりやすむ」といふのがあつて、これも連續であつて複合語ではない。

榮花物語と往生要集 (中)

榮花物語雜誌記 (四)

松村博司

榮花物語と往生要集との關係について、以上外形を主とし、少しく内容にも觸れて言及したのであるが、更に榮花物語の各卷に亘り、往生要集を引用してゐる箇所全部について、内容の上から逐一觀察して見たい。

確實に要集に依つたと思はれる箇所は次の通りである。

卷十五疑 (中一八七頁)

植木靜かならんと思へども風やます。子孝せんと思へども親待たず。一切世間に生ある物は皆滅す。壽命無常なりといへども、必ず盡くる期あり。盛りあるものは必ず衰ふ。會ふものは離別あり。果報として常なる事なし。

人之在世、所求不如意。樹欲靜而風不停。子欲養而親不待。(大文第二欣求淨土、第六引接結緣樂) ①

一切世間、生者皆歸死。壽命雖無量、要必有終盡(富有盡、北本涅槃經) 夫盛有必衰、合會有別離。(中略) 無有法常者。(大文第一厭離穢土 第五人道) ②

卷十六本の事 (中二〇八頁)

九重の宮の内に遊戲し給ふ事、かの忉利天女の快樂を受けて、歡

喜苑の内に遊戲するに劣らず、喜見の宮殿に興するにも勝る。劫波樹の白玉の皿石に座し、曼陀枳尼の殊勝の池に沐浴し、四種の甘露を嘗め、五妙の音楽を聞くに、三十三天の微妙の天女にひとしう思さるゝ御身どもの……

如彼忉利天、雖快樂無極、臨命終時、五衰相現。(中略) 歡喜苑中、遊止無期。劫波樹下、白玉輦石、更無坐時。曼陀枳尼、殊勝池水、沐浴無由。四種甘露、卒難得食、五妙音樂、頓絕聽聞。悲哉此身、獨嬰此苦……(大文第一厭離穢土 第六天道) ③

卷十七管樂 (中二二五頁)

宮々の御方々の女房の心地も、かの忉利天上の億千歳の樂しみ、大梵王宮の深禪定の樂もかくやとめでたし。

彼忉利天上、億千歲樂。大梵王宮、深禪定樂。此等諸樂。未足爲樂。輪轉無際。不免三途。(大文第二欣求淨土 第一聖衆來迎樂) ④

同 (中二二八頁)

この(法成寺ノ)鐘の聲にことなりぬと聞くに、皆心地よろしく、苦しかりつる心とも覺えず。かの天竺の祇園精舎の鐘の音、

諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂と聞ゆなれば、病の僧この鐘の聲を聞きて、皆苦しみ失せ、或は淨土に生るなり。その鐘の聲に、今日の鐘の音、劣らぬさまなり。

或復大經偈云、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂。祇園寺無常堂四角、有頗梨鐘。鐘音中、亦說此偈。病僧聞音、苦惱即除、得清涼樂、如入三禪、乘（垂、祇園圖經）生淨土。（大文第一厭離穢土 第七總結）⑤

同（中三十一頁）

阿彌陀佛と念じ奉る人をば、廿五菩薩も守り給ふなりと、唐の大師のたまへり。

唐土諸師云、二十五菩薩、擁護念阿彌陀佛願往生者。（大文第七念佛利益 第五彌陀別益）⑥

卷十八玉の臺（中二三七——二二八頁）

（法成寺阿彌陀堂扉繪ハ）九品蓮臺の有様なり：これは聖衆來迎樂と見ゆ……草庵に目を塞く間は、即ち蓮臺にあなうらを結ぶ程なりけり……さはこれや蓮花の始めて開くる樂ならんと見えたり……これこそは見佛聞法の樂なめれと見ゆ。よろづめでたし。處はこれ不退なれば、ながく三途八難の恐れを免れたり、永く三界の苦輪の海を分れぬ。（前號A參照）

聖衆來迎樂（大文第一、第一）⑦

蓮花初開樂（大文第一、第二）⑧

見佛聞法樂（大文第一、第八）⑨

當知草庵、瞑目之間、便見蓮臺、結跏之程。（大文第二、第一聖衆來迎樂）⑩

處是不退 永免三途八難之畏……（大文第二、第五快樂無退樂）⑪

同（中三九頁）

（大六彌陀如來像ハ）實には借像にしてたゞ名のみなり（中略）即、三道彌陀佛の萬德と、もとより空寂にして一體無尋なりといひき。（前號B參照）

寂靜但有名、是故當知、所觀衆相、即是三身即一之相好光明也（中略）我所有三惡（惡ハナキ本モアリ）道、與彌陀佛萬德、本來空寂、一體無礙。（大文第四正修念佛、二總相觀）⑫

同（中二四四頁）

（尼達阿彌陀堂懺法二參リ）かの往生要集の文を思ひ出づ。七寶の橋に跪きて、萬德の尊容をまほり……（前號C參照）

即從菩薩、漸至佛所、跪七寶階、瞻萬德之尊容。（下略）（大文第二、第二蓮華初開樂）⑬

同（中二四四頁）

事果て、聲よき僧どもの、過去空王佛、眉間白毫相、彌陀尊禮敬、滅罪今得佛と誦じたる、いみじう尊くおもしろし。

懺法非一、隨樂修之。或五體投地、遍身流汗、歸命彌陀佛、念眉間白毫相、發露涕泣、應作此念。過去空王佛、眉間白毫相、彌陀禮敬、滅罪今得佛。我今禮彌陀佛、亦當復如是。（大文第五助念方法、第五懺悔衆罪）⑭

卷廿二鳥の舞（下二四頁）

（法成寺藥師堂遷佛ニ參加シテ）過去の阿育王の時に、誰か佛を見奉るものとありければ、一人の大臣ありて申しけり。波斯匿王

の妹と申しければ、召して問はせ給へば、まことに佛を見奉れり。世にすぐれたるものなり。空にのぼり給ひて後、七日までその御足の跡猶光りきこそ申しけれ。

賢喻經第三、明釋迦文佛光明相云、佛滅百年、有阿育王。國內民庶、歌佛遺典。王意不信念言、(中略)即問大臣、國中頗有見佛者。答曰、聞波斯匿王妹、出家作比丘尼、年在西垂、云言見佛、王即自出、往詣問曰、道人見佛不耶。答曰、實爾。問曰、有何殊異。道人曰、佛之功德、巍巍難量、非我愚賤、所能陳之、粗說一事、可知殊特、(中略)如來過去、足跡有千輻輪、現光明晃、七日即滅……(大文第五助念方法、第三對治懈怠) ①5

卷三十鶴の林(下一六二頁)

(道長ノ臨終) いみじき智者も死ぬる折は、三つのあいをこそ起すなれ。

故今應作是念、願彌陀佛、放清淨光、遙照我心、覺悟我心、轉境界自體當生三種愛、令得念佛三昧成就、往生極樂、南無阿彌陀佛。

(大文第六別時念佛、第二臨終行儀) ①6

同 (下一六二頁)

すべて臨終念佛思しつゞけさせ給ふ。佛の相好にあらずよりほかの色を見むと思しめさず。佛法の聲にあらずよりほかのよの聲を聞かんとしめさず。後生の事よりほかの事を思しめさず。御目には彌陀如來の相好を見奉らせ給ひ……

佛子年來之間、止此界稀望、唯修西方業。就中本所期、是臨終十念。今既臥病床、不可不恐。須閉目合掌、一心誓期。自非佛相好、勿見餘色。自非佛法音、勿聞餘聲。自非佛正教、勿說餘事。自非

往生事、勿思餘事。(大文第六別時念佛、第二臨終行儀) ①7

同 (下一六三頁)

されど(亡クナツタ道長ノ)御胸よりかみは、まだ同じ様にあたゝかにおはします。(中略)臨終の折は、風火まづ去る。かるが故に、どうねちして苦多かり。善根の人は地水まづ去るが故に、緩慢して苦しみなしとこそはあめれ。

凡惡業人命盡時、風火先去。故動熱多苦。善行人命盡時、地水先去。故緩慢無苦。(大文第二、第一聖衆來迎樂) ①8

同 (下一六五頁)

此娑婆世界は願ひ住むべき所にもあらず。輪王之位久しからず……極もなく人天交じてあひ見る事を得給ふ。(前號D参照)

今此娑婆世界、無可耽玩、輪王之位、七寶不久。(下略)(大文第二、第五快樂無退樂) ①9

同 (下一六六頁)

諸行無常のじゆをば、唯涅槃經の偈とのみこそ知りたりつれ。多くの事どももたり給へりけるものを、うべこそ雪山童子身にもかへけめと聞く人々のみあり。

或復大經偈云、諸行無常(中略)況復雪山大士、捨全身而得此偈。

(大文第一、第七總結) ②0

榮花物語の本文は岩波文庫本により、これを新訂増補國史大系本を参照して訂正した。(頁數は文庫本によつて示す。)

往生要集の本文は、花山信勝博士の「原本校註漢和對照往生要集」によつた。